

修士論文（要旨）

2026 年 1 月

飼育者のコンパニオン・アニマル（イヌ）への愛着スタイル尺度日本語版の作成
と信頼性と妥当性の検証及び対人関係における愛着スタイルとの関連の検証

指導 山口 創 教授

国際学術研究科

国際学術専攻

心理学実践研究学位プログラム ポジティブ心理分野

224J2054

河原 真衣

Master's Thesis (Abstract)
January 2026

Development of a Japanese version of the Companion Animal (Dog)
Attachment Style Scale for Pet Owners, and Validation of Its Reliability and
Validity, as well as Examination of Its Relationship with Attachment Styles
in Human Relationships

Mai Kawahara
224J2054
Master of Arts Program in Positive Psychology
Master's Program in International Studies
International Graduate School of Advanced Studies
J. F. Oberlin University
Thesis Supervisor: Hajime Yamaguchi

目次

1. 問題	1
1.1. 背景	1
1.1.1. 人とコンパニオン・アニマル（イヌ）の関係性の深化と愛着の重要性	1
1.1.2. 愛着の概念、CA（イヌ）の愛着対象、及び愛着スタイルの機能的側面	2
1.1.3. 愛着スタイル尺度の変遷と一致説・補填説の検証の必要性	3
1.2. 研究の目的と構成	5
1.2.1. 本研究の目的	5
1.2.2. 研究の構成	5
2. 研究 1	7
2.1. 目的	7
2.2. 方法	7
2.2.1. 調査対象者	7
2.2.2. 調査期間	7
2.2.3. データ収集方法と分析方法	7
2.2.4. 調査内容	7
2.2.5. 倫理的配慮	8
2.3. 結果	9
2.3.1. 質問紙表の回収率・有効回答率	9
2.3.2. 基礎統計量	9
2.3.3. 属性と CA（イヌ）飼育有無の 2 項ロジスティック回帰分析	11
2.3.4. ECR-GO の項目分析と基礎統計量	11
2.3.5. ECR-GO と CA（イヌ）飼育有無の 2 項ロジスティック回帰分析	12
2.3.6. 対人愛着スタイルの類型化	12
2.3.7. CA（イヌ）の飼育の有無と各愛着スタイルのカイ二乗検定	13
2.4. 考察	13
2.4.1. 仮説の検証	13
2.4.2. 研究 1 の考察	14
2.4.3. 研究 1 の限界と課題	15
3. 研究 2	16
3.1. 目的	16
3.2. 方法	16
3.2.1. 調査対象者	16
3.2.2. 調査期間	16
3.2.3. データ収集方法と分析方法	16

3.2.4. 調査内容	16
3.2.5. 倫理的配慮	18
3.3. 結果	19
3.3.1. 質問紙表の回収率・有効回答率	19
3.3.2. 基礎統計量	19
3.3.3. DAQ の信頼性・内的整合性検証	20
3.3.5. ペットへの愛着尺度の依存的愛着項目のみの信頼性分析	21
3.3.6. 基礎統計量	22
3.3.7. 各尺度の相関分析	22
3.3.8. DAQ の回避と不安を独立変数、LAPS の希求と受容とペットへの愛着尺度 の依存的愛着を従属変数とする重回帰分析	23
3.3.9. 対犬愛着スタイルの類型化	23
3.3.10. DAQ (回避・不安)、LAPS (希求・受容)、依存的愛着ごとの対犬愛着ス タイルの4類型(安定型、とらわれ型、拒絶型、恐れ型)別の分散分析	24
3.4. 考察	25
3.4.1. DAQ の因子構造および妥当性の検討	25
3.4.2. LAPS の因子構造および妥当性の検討	26
3.4.3. 対犬愛着スタイル4類型に関する考察	26
3.4.4. 研究2の考察	27
3.4.5. 研究2の限界と課題	28
4. 研究3	29
4.1. 目的	29
4.2. 方法	29
4.2.1. 調査対象者	29
4.2.2. 調査期間	29
4.2.3. データ収集方法	29
4.2.4. 調査内容	29
4.2.5. 倫理的配慮	30
4.3. 結果	30
4.3.1. 基礎統計量	30
4.3.2. 対人愛着スタイルと対犬愛着スタイルのカイ二乗検定	30
4.3.3. 各使用尺度、属性およびCA(イヌ)飼育状況の変数間の相関分析	31
4.3.4. 対犬愛着スタイル4類型別とワクチン接種状況のカイ二乗検定	33
4.3.5. 飼育行動(散歩の頻度、おやつ頻度、病院の受診頻度)ごとの対犬愛 着スタイル4類型別の分散分析	34
4.4. 考察	34
4.4.1. 仮説の検証	34

4.4.2. 対犬愛着スタイル 4 類型と飼育行動	35
4.4.3. 医療判断（混合ワクチン選択）における 4 類型の差異	35
4.4.4. 社会的サポート要因（同居人数）と補填的愛着の顕在化	36
4.4.5. 研究 3 の限界と課題	36
5. 総合考察	37
5.1. 本研究の目的と主要な知見の整理	37
5.2. 対犬愛着スタイル尺度（DAQ）の意義と位置づけ	37
5.3. 対人愛着と対犬愛着の関係：一致説と補填説の統合的理解	37
5.4. 対犬愛着スタイル 4 類型と飼育行動・判断の関係	38
5.5. 社会的サポート要因と補填的愛着の形成	38
5.6. 本研究の限界と今後の課題	38
5.7. 結論	39
参考・引用文献	I
資料	III
謝辞	VII

1. 問題

本研究は、現代社会において家族の一員（コンパニオン・アニマル：以下 CA）となったイヌと飼い主の関係性を、Bowlby（1969）が提唱した愛着理論の枠組みから捉え直し、従来の愛着の「強さ」だけでなく、不安や回避といった愛着の「質（スタイル）」という観点からその心理的機序を解明することを目的とした。心理学における愛着理論によれば、乳幼児期に養育者との間で形成された内的作業モデル（IWM）は、その後の対人関係における認知や行動のひな型となり、自己や他者に対する信頼感を規定する。しかし、現代において愛着の対象はヒトに限定されず、無条件の肯定的関心を提供してくれる CA（イヌ）もまた、個人の心理的安定を支える「安全基地」としての役割を担うようになっている。特に、獣医療の高度化に伴うイヌの長寿命化は、飼い主との愛着期間を長期化させ、その質的な違いが飼い主の精神衛生や意思決定に及ぼす影響は無視できないものとなっている。そこで本研究では、Zilcha-Mano ら（2011）のモデルを基に、日本の飼育環境に適した「対犬愛着スタイル尺度（DAQ）」を作成・検証し、対人愛着の内的作業モデルが対犬関係へどのように投影・変容されるのかを、「一致説」と「補填説」の両面から検討した。

2. 研究 1

まず、研究 1 では一般成人 2,905 名を対象に、一般他者を想定した愛着スタイル尺度（中尾・加藤, 2004）得点が CA（イヌ）の飼育有無に与える影響を調査した。分析の結果、対人関係において「見捨てられ不安」が高く「親密性の回避」が低い者ほど、有意にイヌを飼育している確率が高いことが示された。また、愛着スタイルを「安定型」「とらわれ型」「拒絶型」「恐れ型」の 4 類型に分類して検討したところ、飼育群には親密さへの希求が高い「とらわれ型」が有意に多く、他者不信が強い「恐れ型」が有意に少ないという特徴が確認された。これは、対人関係で十分な安心感を得られない個人が、無条件の肯定を提供してくれるイヌを安全基地の代替として選択しているという、行動レベルでの「補填説」を支持する知見となった。

3. 研究 2

続く研究 2 では、イヌの飼育者 273 名を対象に、新尺度である DAQ および既存の愛着強度尺度である LAPS（Johnson et al., 1992；安藤, 1999）の構造検証を行った。DAQ の因子分析では、先行研究と同様に「不安」と「回避」の 2 因子構造が抽出され、良好な適合度と信頼性が確認された。同時に実施した LAPS の探索的因子分析においては、原版の 3 因子構造は再現されず、CA（イヌ）に過度な役割を期待し執着する「希求」と、CA（イヌ）をありのまま認める「受容」の 2 因子構造が本対象者において妥当であることが示された。基準関連妥当性の検討においては、ペットへの愛着尺度（金児, 2006）の依存的愛着項目を使用し、各尺度間の相関を分析した。その結果、DAQ の「不安」は「希求」や依存的愛着と強い正の相関を示したが、DAQ の「回避」は依存的愛着と有意な相関を示さなかった。こ

のことから、対犬関係における「情緒的距離（回避）」は単純な「依存の欠如」とは異なる独自の概念であり、DAQ が愛着の質を捉えるツールとして有効であることが証明された。

4. 研究 3

研究 3 では、対人愛着と対犬愛着の関連性、および愛着スタイルが具体的な飼育行動や意思決定に及ぼす影響を検討した。その結果、対人「安定型」の者は対犬でも「安定型」を示すという「一致説」が基本にありつつも、同居人数が少なく社会的サポートが乏しい環境下では、対人スタイルにかかわらず CA（イヌ）への依存や希求が高まるという「補填説」の側面も同時に確認された。また、具体的な飼育行動との関連では、散歩や給餌といった日常的な飼育行動の「量」にはスタイル間の差は見られなかった。しかし、不確実性を伴う医療判断（ワクチンの種類選択）においては顕著な差が認められ、不安傾向の高い「恐れ型」はリスク回避のために多種混合ワクチンを選択し、情緒的距離を置く「拒絶型」は最低限の種類を選択するという有意な偏りが示された。これは、愛着スタイルが表層的な行動よりも、深層のリスク評価や意思決定プロセスに強く影響することを示唆している。

5. 総合考察

以上の各研究結果を統合した総合考察として、本研究は、対犬愛着が飼育者の対人関係における内的作業モデルを基盤としつつも、周囲の環境要因や個人の心理的ニーズに応じて補完的に機能する動的なプロセスであることを明らかにした。「一致説」と「補填説」は排他的なものではなく共存しており、社会的孤立などの状況下ではイヌが心理的な安全基地として機能する重層的な構造が確認された。また、従来の愛着の強さ（LAPS の希求）が「不安型愛着」と密接に関連していた事実は、過度な執着が将来的なペットロス等のリスクを内包している可能性を示している。本研究で作成された DAQ は、飼い主の意思決定や心理状態を精緻に捉える枠組みを提供し、動物医療現場でのコミュニケーション向上や、飼い主のタイプに応じた適切な飼育教育の実施など、人とイヌが共生する社会における双方のウェルビーイングを維持するための重要な心理学的基盤を提供するものである。

参考・引用文献

- 安藤孝敏 (1999). ヒューマン・アニマル・ボンド入門 第9回 人とペットの関係を評価する尺度 (その2) . PROVET, 12月号, 58-61.
- 安藤孝敏(2008). ペットとの情緒的交流が高齢者の精神的健康に及ぼす影響. 横浜国立大学教育人間科学部紀要. III, 10, 1-10.
- Bartholomew, K., & Horowitz, L. (1991). Attachment styles among young adults: A test of a four-category model. *Journal of Personality and Social Psychology*, 61, 226-244.
- Brennan, K.A., Clark, C.L., & Shaver, P.R. (1998). Self-report measurement of adult attachment: an integrative overview. Simpson JA, Rholes WS (Eds) , *Attachment theory and close relationships*, The Guilford Press, 46-76.
- Bowlby, J. (1969). *Attachment and loss Vol.1 Attachment*. New York: Basic Books.
- 濱野佐代子 (2003). 人とコンパニオンアニマル (犬) の愛着尺度—愛着尺度作成と尺度得点による愛着差異の検討 白百合女子大学発達臨床センター紀要, 6, 26-35.
- 福井弘教 (2021). コンパニオン・アニマル (CA) の現状と課題: 神奈川県, 横浜市の動向を手がかりに. 地域イノベーション, (13), 13-26.
- 一般社団法人ペットフード協会 (2024). 2024年 (令和7年) 全国犬猫飼育実態調査結果. 2025年11月6日閲覧,
<https://petfood.or.jp/data/chart2023/index.html>
- Johnson, T. P., Garrity, T. F., & Stallones, L. (1992). Psychometric evaluation of the Lexington attachment to pets scale (LAPS). *Anthrozoös*, 5(3), 160-175.
- 金児 恵 (2006). コンパニオン・アニマルが飼主の主観的幸福感と社会的ネットワークに与える影響. *心理学研究*, 77(1), 1-9.
- 金児 恵 (2018). コンパニオン・アニマルへの愛着の多次元性: 基本的愛着および依存的愛着と精神的健康との関連. *北海道武蔵女子短期大学紀要*, (50), 251-267.
- 金児 恵 (2020). コンパニオン・アニマルからのサポートが飼い主の精神的健康に及ぼす影響—JGSS データによる二次分析から. *北海道武蔵女子短期大学紀要*, (52), 11-27.
- Kurdek, L. A. (2008). Pet dogs as attachment figures. *Journal of Social and Personal Relationships*, 25(2), 247-266.
- 松田光恵・川上善郎. (2008). ペット意識尺度の再検討の試み—ペットブームを支えるペット意識の構造. *コミュニケーション紀要*, 20, 77-98.
- Mickelson, K. D., Kessler, R. C., & Shaver, P. R. (1997). Adult attachment in a nationally representative sample. *Journal of personality and social psychology*, 73(5), 1092.
- Spitznagel, M. B., & Carlson, M. D. (2019). Caregiver burden and veterinary client well-being. *Veterinary Clinics: Small Animal Practice*, 49(3), 431-444.

- Nagasawa, M., Mitsui, S., En, S., Ohtani, N., Ohta, M., Sakuma, Y., ... & Kikusui, T. (2015). Oxytocin-gaze positive loop and the coevolution of human-dog bonds. *Science*, 348(6232), 333-336.
- 中尾達馬・加藤和生 (2004). 一般他者を想定した愛着スタイル尺度の信頼性と妥当性の検討.
- 二階堂千絵・安藤孝敏・梶原葉月(2019). 日本におけるペットロス研究の動向と 展望. 横浜国立大学教育学部紀要. III, 2, 11-22.
- 桜井富士朗・長田久雄 (著) (2003). 「人と動物の関係」の学び方—ヒューマン・アニマル・ボンド研究って何だろう メディカルサイエンス社.
- Shaver, P. R., & Mikulincer, M. (2007). Adult attachment strategies and the regulation of emotion. *Handbook of emotion regulation*, 446, 465.
- 清水裕士 (2016). フリーの統計分析ソフト HAD：機能の紹介と統計学習・教育, 研究実践における利用方法の提案 メディア・情報・コミュニケーション研究, 1, 59-73.
- 杉田陽出. (1999). なぜ人は動物とふれあうのか—人と動物のコミュニケーションを考える. 大阪商業大学論集, (112), 737-755.
- Topál, J., Miklósi, Á., Csányi, V., & Dóka, A. (1998). Attachment behavior in dogs. (*Canis familiaris*): a new application of Ainsworth's (1969) Strange Situation Test. *Journal of comparative psychology*, 112(3), 219.
- 矢野 淳・勝毛智子・大島奈々. (2018). ペットへの愛着がペットの給餌傾向, ボディ・コンディション・スコア, 疾病と予防行動に及ぼす影響. 日本獣医師会雑誌, 71(7), 361-367.
- Zilcha-Mano, S., Mikulincer, M., & Shaver, P. R. (2011). An attachment perspective on human-pet relationships: Conceptualization and assessment of pet attachment orientations. *Journal of Research in Personality*, 45(4), 345-357.